大阪商業大学学術情報リポジトリ

# 瀧澤秀樹著『朝鮮民族の近代国家形成史序説』－中国東北と南北朝鮮－


| メタデータ | 言語: ja<br>出版者: 大阪商業大学比較地域研究所<br>公開日: 2022-05-13<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 裴, 龍, BAE, Ryong<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1183 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

[書評]

# 瀧澤秀樹著『朝鮮民族の近代国家形成史序説』

## — 中国東北と南北朝鮮 —

裵　龍

東アジアの近代国家形成に関する研究や書物を挙げるときりがない。「近代・現代の出発点」、現に存在する「国家の成立」というテーマは、実に重く難しいテーマであると同時にきわめて「現実的」なテーマでもあり、そういった事実が、数多くの解釈に「存在根拠」を与えてきた。

とりわけ、今なお自らの「正統性」を互いに主張し続ける朝鮮半島の二つの国家にとって、その国家形成史は、その自らの「権力の妥当性」に直結する問題として重く認識され、「他の解釈を許さない」問題、言い換えるなら「思想性」の問題として取り扱われてきた。この状況は、根本的には、今なお続いており、それゆえに敏感で「扱いにくい」テーマでもある。本書が、「日本人として朝鮮に向き合うこと」を使命と課し、南北の事情を「分かり過ぎている」著者の手による、課題に正面から取り組んだ作品であるという事実そのものが、まさしく著者の「覚悟」を物語っている。

本書は、1945年の「アジア解放の年」に前後する、朝鮮民主主義人民共和国と大韓民国、中華人民共和国と台湾の成立に、「史実の提示」を「口実」に切り込んだものである。そして、その内容は「史実の提示」という範囲を大きく超えている。著者は、「冷戦体制と分断国家成立史の理解に資する史実の提示こそが本書の目的である（はしがき、viii）」と記しているが、読む側の人間により大きく迫ってくるのは、その「研究領域と課題の提示」であり、また、大胆な問題の設定ということであることは間違いない。

著者が指摘しているように、本書の「核」はⅡとⅢの「朝鮮義勇軍」に関する叙述であるが（はしがき、ix-x）、それを原理的考察（Ⅰ）という「尺度」で考察対象として切り取り、つぎに現在の問題点（関心点）へとつなげ、将来を展望する、という経路は著者が得意とする方法である。そして、明らかなのは、著者の具体的関心は常に現代＝今にある、ということである。著者の特徴＝関心は、視点が歴史のある一定の時代にとどまるのではなく現代と未来にある、というところにある。もちろん、それぞれの内容の「量と深さ」がすべて等しいなどということは不可能で、それが、全体的なバランスに良くも悪くも影響している。がしかし、それが、著者が朝鮮問題に取り組むにあたっての（研究者としても、それ以外としても）一貫した姿勢であり、とどまることを知らない研究意欲と大胆な発想の源にもなっている。これが、本書を読んで通常感じるであろう「アンバランス感」

への筆者なりの結論である。たとえば、本書のⅣとⅥは本当に必要であったであろうか、そのタイトルから想起される期待通りの内容であったであろうか、などといった「素朴な疑問」は、「今日と明日」への関心から決して自由たりえない著者の「知的苦悩」の結果であった、といえないだろうか。

著者の膨大な作業に裏打ちされた大胆な発想は、本書においても、いかんなく発揮されており、それは、朝鮮近現代史の課題を照らしている。そのすべてを、この短い書評で取り上げることはできないが、その一つひとつが、今なお構図的になりがちな朝鮮近現代史の捉え方に新しい光を当てている。

アンダーソンの「想像の共同体」から、東アジアにおける近代国家形成過程の「例外性」をあぶりだし、ゆえに「東アジアにおける『市民社会』の形成可能性は高かったのだ」という指摘は、著者が展開する「混迷を極める現在」と「希望ある未来」への根拠となっている。

朝鮮近現代史の空洞（それは、当然著者が語る東アジア史のそれでもあるが）を埋める作業」も本書の柱である。「朝鮮義勇軍」という、「祖国解放」という夢を奪われ、朝鮮半島に現存する「政権」から忘れ去られた人々にライトを当てる作業は、一つの史実＝歴史に向き合うということであり、空洞を埋めるという作業に他ならない。そして、その存在と消滅（溶解）の過程が、朝鮮半島と中国におけるそれぞれの近代国家形成過程と深くつながっていたことを証明する。それぞれの叙述は、決して新しい史実だけを扱ったのではないとはいえ、それでもなお、多くの人は初めて知る史実に目を奪われるであろう。ただし、本書の真価は、取り上げた史実を近代国家形成と共に論じ、朝鮮半島の南北の政権の「正統性」それ自体に関する鋭い分析を加え、さらに、朝鮮近現代史の新しい課題をあぶりだしたことにこそ、見出されるべきである。朝鮮半島における分断国家成立に関する既存の「解釈」に新たな史実と視点をぶつけ、「分断国家体制が決定的になったのは、『第二次国共合作』決裂のときである可能性（p109）」を指摘することで、「可能性としてのもう一つの現代史」という新しくも大きい（大きすぎる）課題を導き出している。

朝鮮半島に係わる研究者として、現代史の空洞を埋めるのだ、という著者の強烈な意識は、そのまま朝鮮半島を取り巻く現実（あらゆる現実！）に対する著者の係わり方と関連している。本書の中で著者が指摘する朝鮮半島に成立した二つの国家の「正統性へのこだわり」とその「育成＝『新たな想像の共同体』の創出」に関する分析は鋭い。この点は、これまでも数々論じられてきたが、分析対象を中国東北地方における抗日戦争から解放、朝鮮戦争における中朝関係にまで広げ、近代国家形成過程における政権の「正統性」を論じたことは画期的で、ここでも独自で新たな視点が光っている。ただし、ここでは、朝鮮半島における「正統性問題が持つ意味」については十分に語られていない。南北共に「傷」があるからこそ、それを隠すために自らの「正しさ」を誇大に主張（ときに創作）し、相手を誹謗してきた歴史がある。触られたくない「傷」に「そっと触れる」のではなく、新たな史実と問題提起でもっと鋭く迫ることもできたであろう。いずれにせよ、この敏感で難しい問題に、著者がこれからも関心を持ち続け、切り込んでいくのか、を注視したい。

そしてなによりも、この「論争」において南北間で「相対的優越感」を感じてきたであ

ろう北の学者との「論争」を期待したい。ただ、筆者の感じるところでは、「彼ら」はそのことに関する十分な知識を持っており、「不都合な真実」への対処の仕方も心得ている。問題は、「彼ら」と激しく、真摯に論争する関係を構築できなかった（してこなかった）「我々（としか表現しようがない）」の「係わり方」の問題でもある。ここにもやはり、これまでの「係わり方」が影を落としている。

著者の「未来への視点」はやはり優しい（「相変わらず」と言ったら怒られるだろうか）。誤解を懼れずにいえば、歴史分析における厳密さが、「将来展望」では影を潜めてしまっている、と感じるのは私だけであろうか。この「優しさ」が、ときに感じる、著者の「分かりにくさ」の正体でもある。「朝鮮義勇軍」それ自体にしても、題材の難しさ、周辺事情の複雑さ、資料と知識の膨大さ、そして「気遣い」などから、ときに焦点がぼやけ、わかりにくい、と感じてしまう。ここでもやはり「現在への優しさ＝気配り」が著者の鋭さにブレーキをかけているような気がしてならない。

北朝鮮の未来に関して「一段高い次元での国民経済論の再構成（p184）」を語っているが、問題それ自体よりも現状の「見方」に対する批評に終わっているのは残念である。また、その未来が、最終的には「情緒的に語られている」との感は否めない。本書全体で大いに語られるその「必然性」への視点が、ここでは欠けているからではないだろうか。

さらに、「内的」なものを重視するのであれば、現在の北朝鮮の経済システムの性質、その形成過程の中に「再生」への可能性はないのかが論じられてもいいのではないだろうか。傲慢との非難を甘受する覚悟で、「朝鮮史・問題に『日本人として係わる』という『枠』から一度解放されてみたら」と「助言」することを、許してほしい。なぜなら、著者にはそれが許される長い苦悩と実践の歴史があることをその周囲は認めている。

常々感じていたことであるが、大阪商業大学の滝沢ゼミの学生たちは幸せである。実にうらやましい。書評にはそぐわないであろうが、「書評」の最後を締めくくる「感想」として記しておきたい。

（御茶の水書房、2008年11月25日）